
現代パラル

蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代パラレル

【Nコード】

N2218S

【作者名】

蓮華

【あらすじ】

これは思いつきというか妄想話です。前に書いたものとは全くの別物です！！

これは現代パラレル昌浩転生ものでかなりのシリアスな話ですが、ものすごい中途半端から始まっています。

ふと思いついた話なんで計画性も全然ないし考えていません（笑）

一応、続くような感じで終わっていますが、とりあえず短編って事にしといてください。

というかこれを読んでくれる方がいるのかどうかも怪しいですね。はい（泣）

――世は平成の世、『昌浩』の生まれ変わりである安倍昌人と安倍昌明は双子として生まれた。

昔から双子は忌み子とされていたため後生まれである昌人は忌み子とされた。

兄である昌明は家族や神将に愛されて育った。

忌み子として育てられた昌人はある一室に数年、閉じ込められて育った。

その事を知った、安倍家の遠縁の大樹と優奈の夫婦は昌人が8歳

の時に昌人を引き取りを願った。

そのことを知った、安倍家のもの達はもろ手を挙げて喜んで昌人を手放した。

これで昌明や自分達から離れられると。

それから数年後、前世の記憶を取り戻した昌人は自分をないがしろにし、忌み子として傷つけられていたことを覚えていた昌人は彼等を恨んだ。

ずっと昔の約束すら破り、忌み子として扱っていた彼等を。

だが、今世でも新たな友ができた。友は自分の式神となってくれた。

そしてある日、いつものように夜警をしていた時。妖にであった。
そして・・・

てな感じで始まりますではどうぞ
↑

(前書き)

ありがとうございました！

「おのれ！おのれ！安倍昌浩！！」

ギヤアアアアア

霊力のある人を攫い食い恐怖に陥れていた妖は目の前にいる子供に恨みの言葉を吐きながら消滅した。

「――」

それを無感情な眼差しに見つめる子供は安倍昌人。彼は平安時代に

生きてた安部昌浩の生まれ代わりであった。昔の彼なら悲しみや苦しみなどなんらかの反応をしていたはずだったが今の彼にはそんなことすらも

わずらわしい。

彼はこの時代に生きて絶望を味わった。なぜなら彼はずっと信じていた友や家族に裏切られたのだから。

いや、もう友や家族とすら思えない。

「まさ・・ひろなのか？」

後ろからの震えるような声に昌人はゆっくりと振り返った。

その眼差しは先ほどの変わる事もなく無感情だった。

「・・・・・・・・」

「昌浩！！本当に昌浩なのか！？」

「本当に昌浩なの!？」

そこにいるのはかつての友・戦友ともいえる十二神将の姿。

そして前世でも今世でも祖父といえる存在。

そして縋るような声を発するのは紅蓮と太陰、他のものは呆然とこちらを見つめていた。

だがその眼差しは紅蓮たちと分らない。

「……」

「本当に……昌浩なのか？」

老人。安部春明がゆっくりと昌人に近づきながら声をかける。

「……近づくな」

一言。そう昌人が言ったとたんピタとまった春明は、いやその場にいた全員が信じられない。と昌人を凝視した。

「まさ・・・ひろ？」

「それ以上、近づくな」

「どうしたんだ！？昌浩！？俺達が分からないのか！？？」

昌浩！約束したじゃないか！？昌浩！」

そう紅蓮が言っていると今まで無表情、無感情のような顔をしていた昌人はその瞳に激情を宿した。

「先に・・・先に約束を破ったのはお前達じゃないか！」

昌人は伏せていた顔を上げる。その瞳には憎しみが宿っていた。

「今まで俺を蔑ろにしたくせに、俺は忌み子だといらない子だとずつと言ってきたくせに！」

「……今更！！今更俺が『昌浩』だとわかったとたん、俺の傍にいたって！！？」

ふざけるな！」

紅蓮達は信じられない。というかのように呆然と憎しみを瞳に宿して自分達を見つめる『昌浩』を見るめるしか出来なかった。

『まさ……ひ……』

昌人はキツ鋭い瞳で紅蓮たちを見つめた。

「俺は……俺はお前達を許さない！！！」

昌人はそう言って踵を返した。

その姿に彼らははっとした。

「待て！昌浩！！」

ザアアアアアアア

逃がすまいの手を伸ばす紅蓮だったがそこに突如として大きな風が巻き起こった。

その風は紅蓮たちが進むのを阻むように目の前に発生した。

「「「「「なにっ！？」「」「」「」

目を庇い手を交差させる。

子供姿の太陰や玄武はその風に煽られて飛ばされそうになるが足を踏ん張り耐えた。

そして一瞬後風が止まり昌人がいる場所を見ると昌人はいた。

だが一人ではなく昌人の前には昌人をを守るかのように一人の青年がいた。

「昌人、無事か？」

その青年は昌人を背に庇うかのようにこちらを鋭く見つめたまま後ろにいる昌人に聞く。

「・・・夜御。・・・うん、大丈夫だよ」

昌人はその存在に今までの憎悪などなかったかのようにホッとしたような声で答えた。

「そうか……。」

その声に青年。夜御はどこか優しさを含んだ声で答えた。

「お前、なにものだ!？」

紅蓮の声に夜御は紅蓮を睨みつけた。

「貴様には関係ない」

「関係ないだと!?!そいつは昌浩だ!関係ないはずないだろう!」

そう叫ぶかのような紅蓮に夜御は全てを理解した。

後ろにいる昌人の空気が先ほどまで荒れていた。

自分が来て声をかけてからは少しホッとしたように気を少し緩んでいるがまだどこか気が張っている。

その理由が目の前にいる存在達なのだと。

「そうか・・・お前達が・・・」

昌人本人からわずかながらも話を聞いていたがこいつらがそうか。

そういう事か。

夜御は肩から背中に背負っていた己の武器を手にする。

その手には一本の刀。その刃は大きく太い。

チャキ

その刀を目の前に今にも食って掛かってきそうな雰因気を醸し出している紅蓮たちに向けた。

自分達に向けられている刀に紅蓮たちは身構えた。

「・・・夜御」

その時夜御の後ろで黙ったまま様子を見ていた昌人は静かに夜御に声をかけた。

「夜御・・・いい。もう帰ろう?」

夜御はちらりと昌人を見た。

昌人は無感情な眼差しでそこにいた。だけどその瞳の奥は感情が揺れ動いていた。

憎しみ・悲しみ・痛みそれらの感情を押し込めているようだった。

夜御はその姿にそつと武器を収めると昌人に振り向きその頭をポンと叩いた。

敵に背を向ける形になるが夜御は敵に攻撃されるという心配はなか

った。

もしされたとしても夜御にとってその攻撃を防ぐことも跳ね返すこともできるという自信があるからだ。

そんな事よりも夜御は昌人が心配だった。

今の昌人は何かが崩れていきそうなくちやになるような感じがして恐ろしい。

「わかった。行こう」

「うん・・・ありがとう」

そういったきり俯いてしまった昌人の身体をそつと抱き寄せた。そうすると昌人は夜御の胸に顔を寄せて

目をつぶった。

その姿に夜御はその頭をまたポンポンと優しく叩いた。

夜御は先ほどの優しい顔など無かったかのように鋭く目の前の存在を鋭く見つめた。

「いいか、これ以上昌人を傷つけるなら、俺は、いや俺達は貴様等を許さない。

覚えておけ。」

「なっ!？」

言葉も出ない紅蓮達を一瞥すると夜御は昌人を支えるかのように手を添えると右手をそつと添えた。

そして右手をスツと上げ横に風ぐ。

するとその手に反応するかのようにザアアアと風が湧き出し二人の姿を隠した。

そつ、先ほどの風は夜御の力によるものだったのだ。

ザアアアアアア

先ほどの比じゃない程の嵐のような風に今度は紅蓮や春明すら足を踏ん張って腕を顔に交差して顔を守る。

「くっ！・・・待て！！！」

声を張り上げるが風の音にかき消される。

ザアアアアア・・・。。。。。。。。。

しばらくすると風が止み彼等が昌人達がいた場所をみるとそこにはもうすでに誰もいず風が吹いているだけだった・・・。

神将と春明は呆然とそこを見つめるしかできなかった。

「ま・さ・・・ろーまさ・・・ひろー昌浩――！！！」

そんな中、紅蓮はもうここにいない存在にはち切れそうな叫びを上げた。

ずっと探していたんだ。たった一人の存在を。何十年も何百年も。

だがもう、取り返しがつかないのだろうか。

自分達はそれほどのことを唯一の存在にずっと探していた存在にしてきた。

だが、ずっと探していたんだ、ずっと昔の約束があるんだ……。

昌浩……。

（後書き）

これは連載のとはまったく別物です！！！！ご注意を！

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2218s/>

現代パラレル

2011年4月9日11時17分発行